

都留市史

資料編
地史・考古

第2節 先土器時代の遺構と遺物

概観

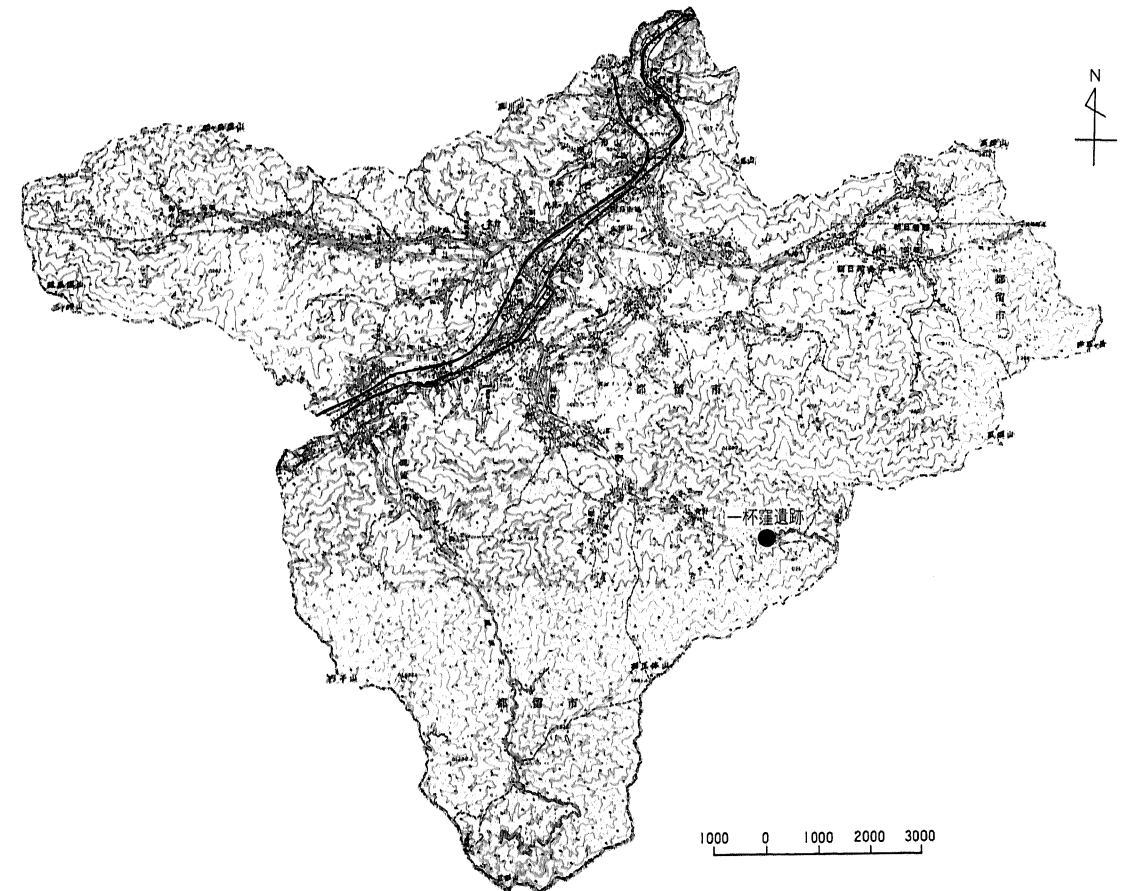
人類がこの地球上に現れたのは、今から200万年前だと言われている。

そして、日本列島に人類が住むようになったのは、今から約3万年前とも、あるいは10数万年前とも言われている。

この時代は、おおむね寒冷な氷河の時代で、気温が極度に低く、氷河が広く発達した時代（氷期）、気温が比較的温暖で氷河が後退した時期（間氷期）が交互に繰り返された。

氷期には、氷河の拡大で海水は減り、海面が低下し、日本列島も大陸と陸続きとなり、ここを北方系のマンモス・南方系のナウマン像・サイ等が渡り、そして、その動物を追って日本列島に北と南の2方向から人類が渡り住むようになったと考えられている。

この日本列島に人類が生活を始めてから、土器を使い始めた今から1万2,000年前までの時代を先土器時代と言う。



第1図 先土器時代の遺跡位置図

考 古

都留市内では、この先土器時代の遺跡はまだあまり発見されていない。昭和42年に、山本寿々雄氏によって都留市大幡に所在する久保地遺跡に近い大幡川の断崖から採取された細石刃・細石核・柳又型類似の尖頭器について報告されている。

また、昭和51年には、菅野から道志にぬける道坂峠の中腹にある「一杯窪遺跡」から石器製作址と思われる遺構が発見され、それに伴い多量の縦長のフレイク（剥片）・コア（石核）などが発見され、これは放射性炭素による年代測定をおこなったところ、約3万年前のものであることが判明したとのことである。

都留市内では、現在までのところこの2か所が先土器時代の遺跡として、知られている。

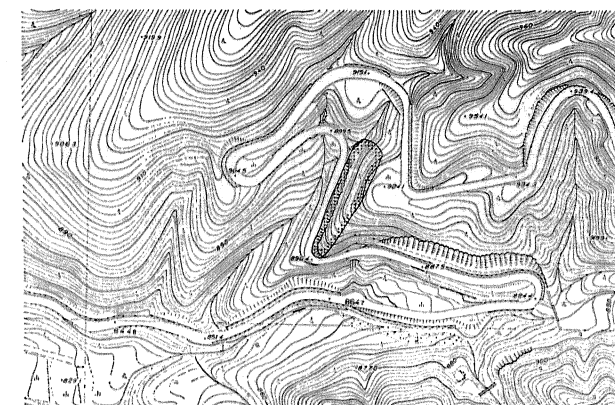
一杯窪遺跡

都留市菅野字一杯窪

遺跡の立地

赤鞍ヶ岳（1,300m）を主峰に東西にのびる道志山地の山懐深い、北西に張りだした尾根の末端に立地する。遺跡のすぐ脇には沢が形成され、清流が流れている。

遺跡は、県道谷村～道志線の道坂トンネル手前、道路の切り通しにおいて発見された。



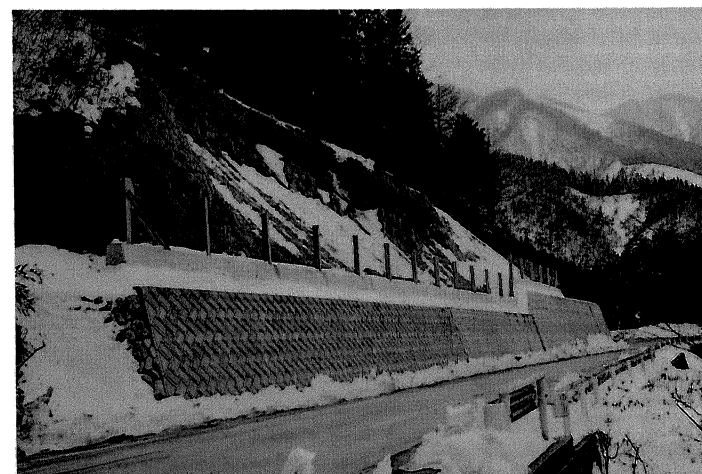
第1図 遺跡の位置

遺跡の調査

遺跡は赤土を取りに来た地元の人によって発見された。たまたま土の中に変わった石があることに気づき、その事を小林安典氏（都留市文化財審議会委員）に連絡したことによって遺跡の存在が明らかになった。小林氏は連絡を受けた変わった石が出る層とその石を調べたところ、それは赤土より出土した先土器時代の石器と思われる剥片であることを確認した。そのことを都留警察署勤務の小林広和氏（現在山梨県埋蔵文化財センター勤務）に教えたところ、小林広和氏は遺跡の重要性を考えてか、昭和53年より自ら発掘調査を始め、2600点以上の石器類と、石器の工房跡と思われる遺構を発見したとのことである。これらは、まだ正式な報告がなされていないために詳細については不明であるが、これらの石器が出土した土層から取り出した炭化物の炭素測定をしたところ約31,870年前のものであることが判明したと一部新聞報道がなされている。

遺 物

現在都留市で所蔵している資料は最初に発見されたもので、これらの石質はガラス質凝灰岩で縦長の剥片とその石核である。



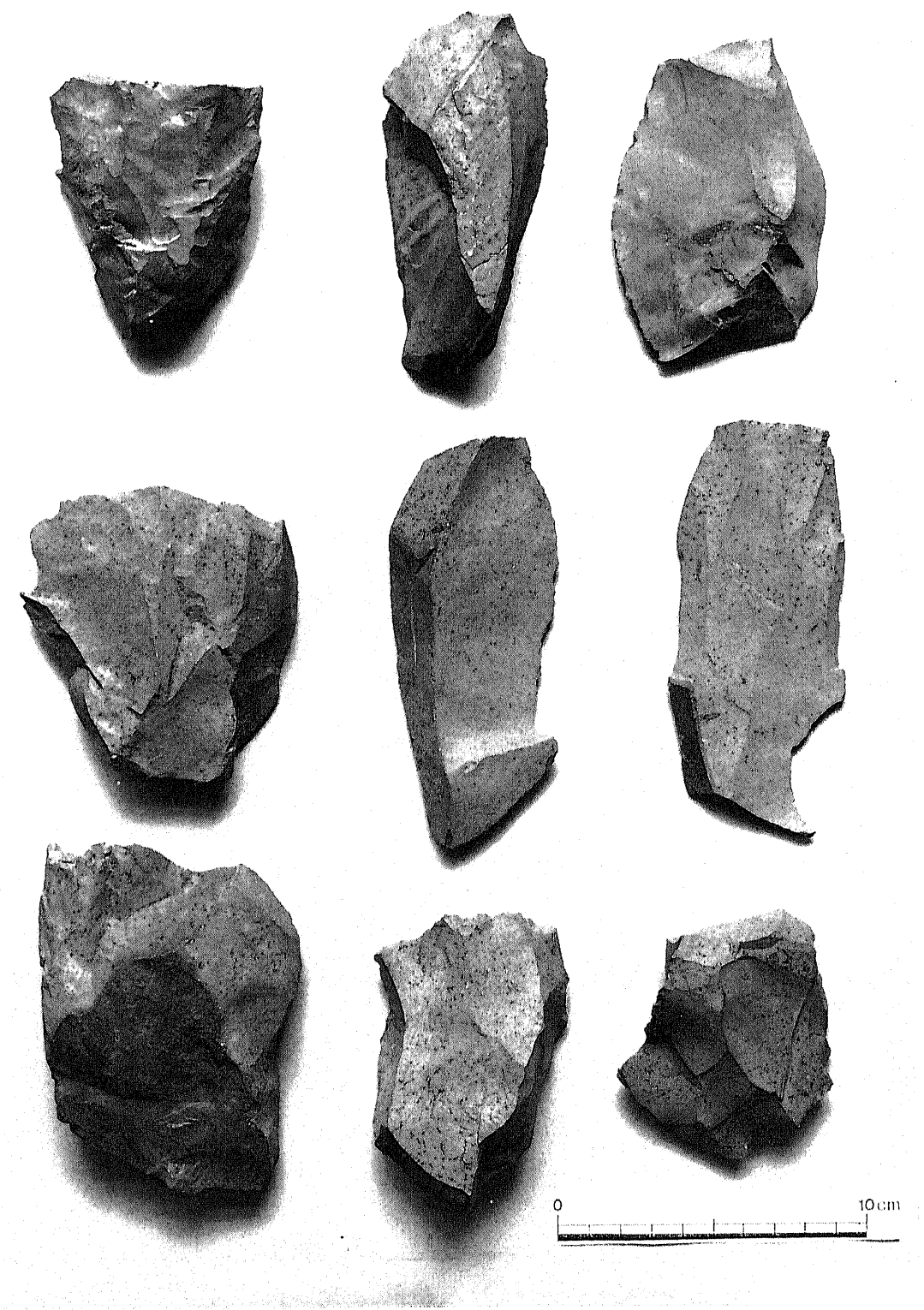
第2図 遺跡の近景

参考文献

- ・加藤晋平 「日本列島における人類文化の出現」 P51 『岩波講座日本考古学6』 1986
- ・山梨日日新聞 1986年1月1日社会面記事「旧石器時代の幕開け」



第3図 一杯窪遺跡出土土器 (1)



第4図 一杯窪遺跡出土土器 (2)